SPICAによる原始惑星系円盤からの 複雑な有機分子輝線の観測予測2 野村英子¹, Chen-En Wei², Catherine Walsh³, T. J. Millar⁴ 1. 国立天文台, 2. 東工大地惑, 3. リーズ大学, UK, 4. クィーンズ大学ベルファスト, UK

ABSTRACT 原始惑星系円盤中の物質進化の理解は、太陽系や系外惑星系の物質の起源 を探るうえで重要である。我々は円盤物理構造モデルにもとづき、ダスト表面反応も含めた化 学反応計算を行い、円盤中の複雑な有機分子生成過程を調べた。その結果、円盤外縁の低温部 においてはダスト表面で水素付加反応が進むのに対し、円盤内縁の暖かな領域においては、光 解離により生じたラジカル同士の反応で複雑な有機分子が生成された。ALMA 観測では、円盤 外縁でCH3OH やCH3CN が観測されている。特にCH3OH は低温領域をトレースする遷移線が 観測されており、モデルとの比較により、円盤外縁部において水素付加反応により生成された 分子が非熱的な過程により気相に脱離したものを観測したと考えられている。本研究では、こ れまでの化学反応計算の結果を用い、円盤からの複雑な有機分子輝線の赤外線放射スペクトル

の輻射輸送計算を行った。次世代赤外線天文衛星SPICAは、中間・遠赤外線領域の高 感度分光観測が可能である。本研究では、SPICA で観測可能な波長帯に現れる複雑な 有機分子輝線をモデル計算した。その結果、このような輝線はSPICA を用いれば検出 可能であり、また、赤外線輝線は励起温度が高いため、円盤内縁の暖かい領域から放射 されることが示された。このような領域は、ダスト表面でラジカル同士の反応が進む領 域、あるいは分子がダストから熱的に脱離する領域であり、また、彗星形成領域に相当 する。ALMAではCH3OH 以外にもHC3N, CH3CN, HCOOH, H2CS といった分子が円 盤より観測されており、これらの分子は、SPICA/SMI やSAFARIで観測可能な中間赤 外線、遠赤外線の波長帯にも遷移線を持つ。SPICAによりこれらの分子を観測すること で、円盤内での暖かなダスト表面反応に対する理解が進むと期待される。

原始惑星系円盤の化学構造

(e.g., Dutrey+ 1997, Markwick+2002, Aikawa+ 2002, Bergin+ 2007) ・円盤表層部:光解離→ラジカルが豊富 CN, C₂H 円盤中層部:分子が豊富

Introduction

原始惑星系円盤からのガス輝線の観測

 \bigcup H₂ Lyman-Werner band transitions **Optical** [OI] 6300A

(sub)mm $CO, 13CO, C^{18}O, C^{17}O, 13C^{18}O,$

原始惑星系円盤からの複雑な有機分子の観測 $C-C_3H_2$ J=6-5 @ 218GHz **d** CH₃CN 14₀-13₀ CH₃CN HD163296, ALMA SV $-14_0-13_0, 14_1-13_1,$ c−C₃H₂ 6−5 ¹³CO 2-1 @ 257GHz, MWC480, ALMA cycle 2







~ ALMA 観測 ~

TW Hya 円盤からのメタノール分子の検出

CH₃OH @ 304, 305, 307GHz TW Hya, ALMA cycle 2 Stacking three lines of CH₃OH



→ 非熱的脫離 Model: $x(CH_3OH) \sim 10^{-11}$ fits observations + Herschel/HIFI obs. of cold H₂O line (Hogerheije et al. 2011) $CH_3OH/H_2O \sim 0.7-5\% \Leftrightarrow comets$ 3.20 km/s 2.90 km/s 2.60 km/s

輝線放射領域: 30 - 100AU







Walsh, C., Loomis, R.A., Oberg, K.I. et al. 2016, ApJL, 823, L10 Walsh, C. 2015, EAS, 75, 315 Walsh, C., Millar, T.J., Nomura, H., Herbst, E., Widicus-Weaver, S., Aikawa, Y., Laas, J.C., Vasynin, A. 2014, A&A, 563, A33